

---

# 転校生に恋をして

彰一

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

転校生に恋をして

### 【Nコード】

N2888R

### 【作者名】

彰一

### 【あらすじ】

高校2年生の主人公「工藤誠一」のクラスに転校生の女子がやってきた。転校生は、なかなかクラスになじまず、先生から彼女と仲良くなるきっかけを作るようにいわれるが・・・誠一にとって、彼女は日に日に気になる存在へと変化していく。そこから始まる、普通の恋物語。

## 1 (前書き)

登場人物や、施設名などは、フィクションであり、実在しません。仮に、実在したとしても、なんら関係性はありません。少しずつ、連載していきます。感想など、是非お寄せ下さい。

夏休みが明けた二学期のはじめ、僕は恋をした。

朝のホームルームの時間、皆がチャイムに諭され、着席した直後に、担任の先生が、一人見慣れない女子を連れてきた。

「夏休みも終わり、高校2年の君たちは、来年の受験に備え、又部活動においても気を引き締めなくてはならない時期になってきました。私は、今このときこそ、人生のターニングポイントだと思いません。」

そう言う先生は、隣に立たせた女子を紹介し始めた。

「そして、今日から、君たちと同じクラスで、一緒に勉強する女性が一人数間になることになりました。名前は……。」

そう言い放つと、後ろを向き先生は、黒板に文字を書いていく。

そう、その女子の名前だ。

(赤木紗耶香)。

「「あかぎさやか」さんです。こちらへ先月の終わりに引っ越してきました。この土地に初めてこられたようなので、君たちも仲良く、そして親切にするように。」

教師の転校生を紹介するのは、マニュアル化しているのだろうか？そう思うくらい、僕の17年という短い人生経験の中でも、小学校、中学校通じて何度か、同じような台詞を聞いたことがある。

「じゃあ、赤木さん。何か一言いいですか？」

「……皆さん、よろしく。」

赤木紗耶香という女子は、先生に諭され、ただ一言だけ、声を出した。僕は聞こえたが、どうやら後ろの席の連中にはかすかにしか聞こえなかったみたいで、少しガヤついた。

「赤城さん。窓際の一番後ろの席に着席してください。」

赤木紗耶香は、そういわれると、ピンと背中に針金が入っているかのような姿勢のまま、席へ向かって歩き始めた。僕は、そんな彼女の姿を目で追った。

こんなことも言うのは、どうかしているが、赤木紗耶香は、可愛いというよりも綺麗だ。身長は170センチに少し及ばないくらいだが、モデルと言っても過言ではないくらい、細身で、肌の色は、この猛暑の夏の中にあって、色白の部類に入る。髪型は、腰と肩のちょうど中間くらいのロングヘアで少し色は赤みを帯びている。

「よろしく。」

小声で、席に座った赤木紗耶香に、隣の佐々木美栄よしえは、声をかけた。

しかし、当の赤木紗耶香は、軽く会釈をしたに過ぎず、転校初日の緊張なのかどこか暗い表情を浮かべていた。

「こら！工藤！！さっきからジロジロと赤木さんばかり見て、私の話は、まだ終わってませんよ。」

工藤は、僕。フルネームは、「工藤誠一」。僕の席は、教壇のまん前の席で、さっきから赤木紗耶香を観察していたのが、先生にはバレバレだった。

「すみません。」

僕が、先生に謝る姿をみた、クラスの連中は、どつと笑った。皆が皆、僕に向かって、冗談っぽく罵るような声を浴びせてきたが、その中で、やはり彼女、赤木紗耶香だけは、ひとり窓の外にある青く澄み切った空を眺めていた。

「誠一。」

校門のまえで、僕は、同じクラスの佐々木美栄に声をかけられた。

「おう、美栄。どうした？」

「ねえ、一緒に帰りましょ。」

「イヤだよー。周りに変に疑われたらどうすんだ?!」

「いいじゃない、と言ってもついでだし。」

「ついでって何？」

「本当は、いつしよに帰りたかった子がいたんだけど、ふられちゃつてさ。」

「なんだ？ 美栄にもついに青春か？」

僕は冗談っぽく言ってみた。

「違う！ 赤木さん！ 赤木紗耶香さん！」

美栄は、少々怒った感じになっていたが、すぐそれは止んだ。

「あの転校生か？」

「そう。まあ、今日は初日だから、隣の私がまず仲良くなるうと思つてさ、帰りだけ誘つただけだよ。」

美栄は、明るい性格で、面倒見のよい顔も持ち合わせていた。たいていこういう女子は、どこの学校にもいるもんで、大体がクラス委員だったりするわけで、美栄ももちろんその類だった。

「断られた？」

「そう。で、一人さびしく帰ろうとする工藤誠一くんの背中が見えただんでね、しょうがない一緒に帰ってやるかと思つたの、それなのに。」

「俺は、別に寂しくしてたわけじゃなくて、部活も入っていないんで早く家に帰ろうと考えていただけ。」

「あ?!誠一。照れてるな?」

売り言葉に買い言葉。その言葉にも反論しようかと思ったが、美栄の口は止まらない。

「わかってる。それ以上は、言わないでくれ。若い子と一緒に歩くのは年頃の男の子は照れるもんだ。」

「若い子って、おまえな?。」

「なんだよー?おっさん。」

……そう、実は、僕、一度高校受験に失敗している。美栄をはじめとした同じクラスの連中とは、1つだけだが歳が違う。

「一個しかかわらねーだろ!?!もういい、帰る!」僕は美栄に、そういつて、歩き出した。

「ちょ、ちょっと、待ってよ?。」

弱弱しい甘えるような声で、美栄は僕の後を追ってきた。

「美栄。あの転校生どうだ?」

「赤木さん?どうって?」

「いや、普通転校生って気になるもんだろ?」

「せいいち?。さては一目ぼれだな?」

「あー、聞く相手間違えた。」

僕はあきれたように言い放ち、少しだけ歩くスピードを上げかけた。

「ごめん、ごめん。ちゃんと話すから。」

「よし、それでいいだろう。」

「まあ、今日初めてだから、よくわかんないんだけどさ、空き時間とかに声かけても、そっけないんだよね?。なんか、なじめないじやなくて、なじまない感じかな?」

「ふん。」

美栄の言葉に、相槌を打つように返事してみた。

「ふうん、じゃなくて！クラス委員としては、浮いた存在がいたんじゃない、ほおっておけないじゃない！」少々美栄はイライラ口調だった。もちろんその原因は僕にある。

「そういえば、誠一。なんで部活やんないの？」

「あのね、うちの学校で、まともな部活動が出来ると思いますか？」

僕の通っている学校は、もともと女子高で、僕が入学した年から、共学へと変わった。しかし、それでも、まだまだ男子生徒の数は、女子の数に比べ7対3の割合で少ない。当然男子が入れるようなクラブはなく、また、僕がやりたいようなクラブもない。それだけが理由ではないが。

「男子たちで、野球部作つたら？ 花の高校球児！ 女子からもてるよ。」

よほど美栄は、僕に部活動をさせたいようだ。多少不純な理由でも、それをさせようとしている。

「そんな事言つても、俺はやらないぞ。全国で必死に練習している高校球児に申し訳が立たない！」

「え、もつたいない。誠一、けっこうガタイもいいし、運動神経もいいのにさ……。」

そんなやり取りもありつつ、駅まできて、美栄とはそこで別れた。僕は一人電車に乗り、考え事をした。

確かに、美栄の言うとおり赤木紗耶香は、他の連中とは一線敷いている感じに取れた。僕も、クラスの連中とは、初めの頃、歳が1個違うという理由だけで、なじめなかった。しかし、そんな心配もよそに、美栄のような女子がクラスにいたおかげもあったか、日に

日になじんでいったことはあつた。が、あの赤木紗耶香は、そんな僕とは違ったように見えた。まあ、まだ初日、わからない。単なる僕の邪推なのかもしれない。

「今日もこれで終わりにします。それでは、皆さん、気をつけて帰るように。それと、工藤。職員室へきなさい。」

赤木が転校してきてから、一週間が過ぎた。そんな日のホームルームの最後に先生に呼び出された。

「何ですか？先生。」

これといった悪さもしておらず、僕には、先生に呼び出されたことが疑問だった。

「実はな、工藤。赤木さんのことなんだが、一週間たったが、私から見て、どうもクラスになじめていないようなんだが……」

「先生。それは、俺に言うことではないような気がしますか？」

「本来はな……。本来なら、クラス委員の佐々木に相談することなんだが、今回はお前に相談した方が良いと思ってな。」

先生の表情は神妙な感じだった。

僕が考えるに、教職者が生徒に相談することは、少々疑問があったが、この先生にいたっては、まだ20代で、女子比率の高いこの学校においては、人気のある方であり、熱血とまではいかないが、生徒を思う気持ちだけは感じる事が出来た。僕も、この先生に好感を持っていた。

「佐々木さんは、結構何とかしようとかがんばってますよ。何かと彼女のことを誘っているみたいですし……。」

「そうか！ それで？」

「不発。」

「そうなのか。」

一瞬、先生の表情からうれしさが感じられたが、すぐに、落胆の表情へと変化した。

他の連中だつて、何もしていないわけじゃない。当初、入れ替わり状態で彼女に、声をかけている。僕以外は皆一度は彼女に声をかけたに違いないと思うほどだ。しかし、彼女のそっけない態度に、日に日に彼女へ近寄るものが少なくなつた。

「それは、それとして、先生は俺に何を相談したいんですか？」

「この話は、いずれ皆も知ることになるが、あえて私は、お前にか言わない。」

「もつたいぶらずに！」

「スマン。実は、赤木さんも、工藤。お前と一緒になんだよ。」

「え！？それってどういう意味なんでしょう？」

「つまり、クラスの皆とは年齢が違うんだ。」

その言葉を聞いても、特に驚きはしなかった。確かに、何か違うとは思つたが、そんなことが、としか思わなかった。

「そうですか。」

「なんだ？ 私はてつきりびつくりするもんだと思つたぞ。」

「なんか、初めて見たときから妙に大人びた感じがしてたんで、特にびつくりすることもないですね。」

「それなら、いいんだが。」

「それで、先生。赤木さんの歳は？」

「今年、お前と一緒に、18になる。」

少々考えたが、先生が何を画策しているかわかった。

「じゃあ先生は、同じ穴の貉同士で仲良くなつて、そこからクラスになじむように仕組めつて言いたいんですね？」

「理解が早いじゃないか。」

思惑通りといった感じの表情で、どこかいやらしい大人のしめしめという雰囲気的笑みを先生は滲ませていた。

「こういうことは、先生が何とかするべきじゃないんですかね？」  
「そういうな。できれば、同じ年代同士で仲良くなるように努力することが、一番良いことだと思っている。」

まあ、一理ある。大人に指図されて、仲良くなれるはずがない。仲間は自然とお互いが魅かれあって仲良くなるものだから。しかし、お互いということが条件だ。向かい合ってこそ近づくきっかけになる。

「わかりました。やってみますよ。」  
しづしづ先生の申し出を受ける格好となった。

もし、年が違っただけの理由でなじまないようにしているのなら、かなり嫌な女だ。きつと何か他にも理由があるんじゃないかと思っただ。

今日はもう、彼女は帰っただろう。僕は、とりあえず明日にでも彼女へ声をかけることを決めた。どうやら、僕は、少しずつではあったが、彼女に興味を持ち始めたようだった。

「はい。今日も終わりです、皆さん気をつけて帰るように。」  
先生の、ホームルームを締める言葉とともに、赤木紗耶香は、誰よりも早く、教室から出て行った。

僕は、そんな彼女の迅速な行動にあわてて、後を追うように教室を後にした。

「赤木さん！」

校門の前で、彼女に追いついた僕は、息を若干切らしながら、声をかけてみた。

彼女は、僕の呼び止める声に反応し、立ち止まってから、僕の方に振り向いた。

相変わらず、彼女の表情には、明るさを感じなかった。

「ちょっと、いいかな。」

声をかけてみようとは、思ったものの、いざ声をかけるにしても何にも考えが浮かんではいなかった。一緒に帰らない？などと異性へは声をかけづらい。

彼女は、少しだが、頭を下げたように見えた。

校門からしばらく歩いたが、僕ら二人には沈黙が続いた。ちょっと、いいかな。なんて声をかけたもんだから、当然、僕から話を切り出さなくてはならない。意を決してみた。

「赤木さん、家は遠いの？」

「いいえ。」

「そっか。」

「なんのようでしたか？」

「いや、特に用があったわけじゃないんだけど、ほら、まだ赤木さんと話してなかったから。」

「……焦った。本当に何も用事はないが、いきなり核心もつけない。」

「そうでしたか。」

彼女の受け答えに棘はない。しかし、僕に対して、壁を作っていたように思える。

「赤木さん、こっちきてまだ日が浅いけど、慣れた？」

「不自由はしてませんよ。」

「そっか。」

言葉のキャッチボールは、彼女とは難しい。この調子ならば、クルスの連中も遠のくはずだ。

そうこうしているうちに、僕は駅までやってきた。

「赤木さん、じゃあ俺電車に乗るから。」

今日の成果はほとんど得られなかった。しかし、そう思った矢先

のことだった。

「いえ、私も電車に乗ります。」

「そうなの？じゃあ……。」

それから、言葉も交わさないまま、僕たちは私鉄の下り電車に乗った。

そこで、不思議に思ったのは、僕が座った隣に彼女が座ったことだった。普段、他人とは距離を置いているような彼女だが、それを考えると不思議でならなかった。

彼女は、鞆から、MP3のポータブルプレイヤーを取り出し、イヤホンを耳にかけた。

しばらく、時がながれるのを待ち、僕は彼女の肩を叩いて尋ねた。

彼女は、イヤホンと外し、僕の方に目を向けた。

「何を聴いているの？」

彼女の答えは、実力派で知られる女性R&Bシンガーの曲だった。

「へえ〜。赤木さん、そのアーティストが好きなんだ〜。」

しかし、彼女からの答えは違った。

「いいえ、特に好きじゃありませんよ。」

好きでもないアーティストの曲を聴くってか？！ますますもってわからない。

そして電車は、僕らが乗った駅から4駅目の駅に到着した。彼女はMP3プレイヤーを鞆にいれ、席を立った。

「それじゃあ、わたしはここで。」  
「そういつと彼女は、ホームへと向い電車を降りていった。」

僕は考えるよりも先に、彼女を追ってホームに出た。そんな僕に気付いた彼女は、僕に首をかしげながら聞いてきた。

「工藤君もこの駅ですか？」  
「ドキッとした。僕が用事あるのは、実は一つ前の駅だった。」

「いや。実は、一つ手前の駅。」  
僕は苦笑いしながら、答えた。

「そう。では、お気をつけて。」  
「そう言い放ち歩き出した彼女を僕は慌てて呼び止めた。」

「ちよ、ちよっと待って。ここから歩いていきます。」  
「だからどうしたというのだ？ 彼女の表情は、そう物語った。」

駅から出て、破れかぶれな気持ちで僕は、彼女に対して核心をついた。

「赤木さん、まだクラスになじめてないよね？先生から聞いたんだけど、赤木さん今年で18になるんだって？もしかして、それ以外のみんなと距離とっているのかな？」

それを聞いた彼女は、僕をにらみつけた。今まで、そんな目をした彼女をみたことがなかったので、僕は驚愕した。やはり、年齢の

ことを異性に言われるのは、どの年代においてもタブーなのかと思  
った。僕は、慌てて弁明した。

「いや、違うんだよ！そういうことをいいたいんじゃないよ……  
。実は、俺も君と同じ生まれ年なんだ。つまり、皆より一個上。だ  
から、赤木さんがそれで、悩んでいるなら力に慣れるんじゃないか  
って……。」

「そう。ありがとう。でも、そんなことは気にしてない。私が、な  
じまないのは、私自身の性格に問題があるだけだと思う。」

「そうか、それならいいんだけど。」  
「良くはない。彼女の性格が問題で、クラスになじまないようにし  
ているのなら、クラスにとって彼女はホント爆弾になりかねない。  
それなら、今僕は、何のためにこんなことをしているんだ？と思っ  
てしまう。だが、僕はそれ以上に、言葉は見つからなかった。」

そして、僕らは、駅から10分ほど歩いた表通り沿いにあるとあ  
るビルの前まで来た。マンションではない5階建てのビルだった。

「それじゃあ、私はここで。また明日。」  
「そう言い残し、彼女はそのビルへと入っていった。」

何の？ビルだろう？疑問が出てくる。住居ではなさそうだし、学  
校帰りに、得体の知れぬビルに入っていく、彼女はいったい何をし  
ているんだ？まあ、なんか悪さをしてなきやいいんだが……。  
考えてももちろん納得のいく答えは出ない。

「しょうがない。俺も行くか。」

そう独り言をつぶやき僕はビルを後にした。

歩き始めようと一歩踏み出し、ふと思った。

(また明日。)

彼女が言った言葉が頭によぎる。少なくとも、僕に対して彼女が歩み寄った感じに取れる言葉だった。

「まずい。もうこんな時間だ!」

携帯電話の時刻表示をみて、僕は慌てて走り出した。

「……また明日。か……。そうか。」

僕は、走りながら顔には笑みがこぼれていた。少しだが僕の心の中に嬉しさが込上げてきた証拠だった。

次の日の朝、僕はクラスで一番早く登校し、未だ静かな教室の中で、独りで時がたつのを待った。特に何を考えているわけじゃなく、無心に近く、ボーっとしているだけだ。

早く来た理由は、特にない。ただ今日は、早くに目が覚め、家でそそくさと、家事をする母親の邪魔にならないようにと思いついた結果になったに過ぎない。

始業時間の30分前に、教室の後ろ側のドアが開く音がした。ようやく、この退屈な時間から開放されると思い、後ろを振り向いた。しかし、振り向いた途端に、退屈を凌ぐにはあまり適さない人物がそこにはいた。

そう。赤木紗耶香だ。

僕は、一瞬びっくりしたが、昨日のこともあったので、挨拶を試みた。

「お、おはよう。」

僕のその言葉は、ドギマギした不自然な感じになってしまった。

正直、彼女相手では、どう対処したらよいか、昨日の会話だけでは見出せずわからない。

しかし、思ったのは、彼女のことだ、どうせそんな朝の挨拶にさえ返事はあまり期待が出来ないということだった。

「おはよう。」

意外だった。彼女は、僕の方を見ることはなかったが、僕の挨拶に、返事をしたからだ。やはり、昨日の僕の行動はよい方向へと導いたのか？

彼女が教室にやってきてから、何分間だろうか？ 昨日の下校時と同じく、僕ら二人には、しばらくの沈黙があった。僕の次に来たのが、彼女で、もちろん先ほどの僕からは、想定範囲外となるわけで、何を話したらよいのかも考えていない。本来なら、会話することにはいちいち自分が話すこと一語一句考えることはないが、彼女に関しては、別。

共通の趣味の話題があるわけでもなく、むしろ何を考えているかすらわからない。彼女をまだ僕は知らない。だから、僕は、他の連中のように気軽には話しかけづらく、会話の一步すら、昨日の件があっても踏み出せずにいる。

「工藤君。」

ビックリした、まさか彼女から離しかけてくるなんて！僕は、危険を察知する動物がごとく、すばやく彼女の声に反応し振り向いた。彼女は、僕に近づくわけでも、席から離れることもしていなかった。席に座ったまま、こちらを向き語りかけてきたのだ。

「何？」

妙な緊張感があった。同じような体感をしたことがある。宿題を忘れて、先生に怒られる寸前のあの緊張感と似ていた。

「昨日のことだけど・・・。」

彼女の声は、やはりボリウムが低い。教室の前と後ろでは、聴

くにしても、少々難儀する。

僕は、あえて、席を立ち、彼女の方へ近寄り、微妙な距離感を保ちつつ、会話を続けた。

「昨日のこと？ 一緒に帰ったこと？ ゴメンね。そんなつもりじゃないんだけど、変に皆から疑われたら、赤木さん困っちゃうよね？ 何か言われたら、適当に喋っておくよ。例えば、ストーキングしてたとか？ ……いやいや冗談。ゴメン。」

どうせ、下校のことだ。それしか思い当たる節はない。だってそれ以外、彼女との接点はなかったからだ。冗談を入れたのは、場が和むかなと思って言ったに過ぎないが、僕は言うてすぐ、後悔していた。彼女は、僕の冗談にクスリとも微笑することもなく、全くの無反応だったからだ。

「そのことじゃないの。」

「そのことじゃない?! じゃあ……………」

「ビル。」

「ビル?! あー、そのことね。」

「私が、あのビルに入っていったことは誰にも言わないでほしいの。」

「別に、それは構わないけど、何か理由でもあるの?」

「それは……………」

彼女は、僕の問いに言葉が詰まった。どうやら、答えづらいことだろう。いよいよもって、妖しくなってきた。何か悪いことに巻き込まれてなきやいいのだが。

「いいよ、いいよ。皆に話すなっことは、俺にも知られたくなんでしょ? だから、言わなくていいよ。」

これは、嘘。気になる。気になってしょうがない。人間、一度知りたいと思つたことは、どうしても知りたいものだ。人間は、昔から好奇心の塊のようなものであつて、だからこそ、今日の技術力発展や学問結果を残してきた。人間の好奇心があつてこそ、人間の進化というわけだから。

僕は、知りたい。

「ごめんなさい。」

彼女は、自らの頼みごとに関する理由が話せないことを申し訳ないと思つたのだろう。

「いや、謝らないで。別に赤木さんは悪いことしているわけじゃないんだからさ。それとも、何か悪いことしてるの？」

話さなくても良いといいつつ、その辺はやはり気になる。だから僕は、自分の発する言葉の流れで、聞いてみた。なんだ、けっこう僕も話す方が上手いのかな？

「悪いことなんかしていない！ それは、絶対に……」  
彼女の表情は、僕の問いに反発するような怒りが込められているかと思つたのだが、実際は、許しを請う、子どものようなものだった。

「それなら、いいんだ。」

「ありがとう。」

そこで、彼女との会話は終わった。3分も話していなかったが、僕は、彼女との会話が長いものと錯覚していた。

「おはよー！ー！」

僕が、赤木との会話を終え席に着いた後すぐに、美栄がいつものように、神々しい明るい大きな声とともにやってきた。

「お、誠一、今日早いじゃん。珍しいこともあるんだね。こりゃ今日は、雪が降るかな？　もしかして槍とか？」

「いい加減にしろ、美栄。これも、親孝行の表れだ！」

「何それ？　変なの。……赤木さん、おはよー。」

「おはよう。」

なんだ、挨拶は、誰にでも出来んだな。僕は、心の中でそうつぶやいた。

どことなく、赤木の人間らしい部分を今日発見できたかもしれない。これであれば、朝早く来るのも悪くない。

僕は、下校時間になると、誰よりも早く教室を後にしていった。いつもなら、赤木が一番だが、今日は、僕が一番。

僕は、走った。終業時間は午後の3時。駅までは徒歩で約10分少々。いつもなら早くて、午後3時23分発の私鉄の下り電車かもしくはそれ以後の電車に乗るのが、僕の習慣になっている。しかし、今日の昼、僕の携帯にメールで連絡があり、その内容に僕は、心が躍った。だからこそ、今日は早くその事実を確認したかった。目指すは、午後3時8分発。

いつもは歩いている道を駆け抜けた。今日は、風が強くて、都合のよいことに、今の僕には追い風となった。この調子なら駅まで、大体5分から6分ほどで着くだろう。

確かに間に合うはずだった。駅の前まで来たとき、飛び降りるように、改札に直通する地下道の階段を下った。しかし、ちょうど階段をおり終えたとき、僕が下ってきた階段を上がろうとする一人の老人がいた。

その老人は、階段横にある手すりを左手でしがみつき、右手には白い杖を握り締めていた。よくある光景の1つとも考えたが、僕には、その白い杖の意味がちゃんとわかっていて。僕は、踵きびすを返し、老人に歩み寄って語りかけた。

「おじいちゃん、手伝いましょうか？」

老人の目は、薄暗いサングラスの奥で閉じられたままだった。しかし、僕の声に反応してくれたのか、口元が緩み、笑顔で応えてくれた。

「すみません。歳を取ると階段がきつくて。」

「じゃあ、おじいちゃん。俺がおんぶつてあげるよ。」

「いやいや、そんな。おたくさんがたいへんじゃろう。」

普通なら、おんぶつてことはないだろう。肩を貸す程度で老人は十分だと思っていたかも知れない。

「いいんだって、今日は気分もいいし、俺から鍛えてるから大丈夫だよ。」

「では、お言葉に甘えて……。」

老人は、困惑しているが、僕の申し出に応えて、僕の背中に身体を預けてきた。

「よし、いくよ！ しっかりつかまってね。」

僕は、老人にそう声をかけるとともに、声を発することで気合いを入れた。

ゆっくり。ゆっくり。ゆっくりとしたスピードで上がった。地下道入り口前で老人を背中から降ろし、老人は、盲目にもかかわらず気配でわかったのか、僕の方をちゃんと向いて、深々とお辞儀をしてくれた。

「ありがとう。」

その言葉が、僕は嬉しかった。その地下道入り口から駅舎にある大時計が見え、針は、3時10分を指していた。だが、老人の感謝の言葉に僕は、乗れなかった後悔よりも、老人を助けた満悦感を覚える事ができた。

老人と別れの挨拶をし、再び、地下道の階段を下ろうと思った。

すると、今別れたばかりの老人の声が聞えた。なんてことはない老人が被っていた帽子が飛ばされたのだ。しかし、老人は目が見えないので、あたりをキョロキョロするばかり、僕は、宙を舞っている

帽子を追っかけた。

ようやく風がおさまり、帽子が地面に降り立った。僕は、その帽子を拾おうと近づくと、誰かがそれを拾ってくれたのだった。

なんと、拾ったのは、赤木。

「これは、工藤君のですか？」

風に煽られてか、彼女の長い髪が乱れていた。

「いや、あのおじいさんの……。」

僕は老人の方を指差した。

「そうなの。」

彼女 女は僕の答えを聞くと、老人に歩み寄って、帽子を手渡した。

「おじいちゃん、この帽子、飛んできましたよ。」

彼女の声は、とても穏やかで優しいものだった。

僕は彼女の後ろで、彼女のその声にとっても心が和む気持ちになっていた。

「ありがとう。今日はいい日だ。親切な若者2人に助けられた。私は幸せもんだ。」

僕はそんな老人の言葉に笑いながら言葉を返した。

「おじいちゃん、運がいいなら、風で帽子は飛ばされないよ。」

「いやいや、地獄の中に仏とはよく言っただもんだ。」

老人は笑っていた。

再び、老人と別れた。器用に杖を使い、ゆっくりとした足取りで歩いていった。僕ら2人は、その老人の背中をしばらく見守りながら見送った。

さて！ と思いついたように、僕は再び地下道の階段を下りるこ

とにした。

僕が下りだしてから、後を追うように彼女が下ってきて、後ろから僕に、話しかけてきた。

「工藤君。優しいんですね。」

彼女の声色は、老人に話しかけて時と同様に穏やかなものだった。

「いや。そんなことは。」

何か、照れた。照れくさすぎて後ろが振り向けなかった。しかし、普段はあまりそんなことはしない。本音で言ってしまうと、気がつくことがあまりない。今日はたまたまだけで。

「さつきはありがとう。」

僕は照れながら、彼女へお礼をした。

「それはどういう意味？」

「おじいさんの帽子拾ってくれたらどう？」

「たまたま、目の前に落ちてきただけよ。」

僕もたまたまなら、彼女もたまたまということか。

「それに工藤君は、私にお礼することはないんじゃない？」

それもそうか。自分自身で言い聞かせるような感じで、2回頷いた。

結局急いだ甲斐もなく、僕はいつもの時刻の電車に乗った。赤木は、またしても僕の隣に座っていた。

「工藤君。急いでいたのに残念ね。」

彼女は、不意に僕に話しかけてきた。やはり、その目線は、僕には向けられず、まん前の車窓に向けられていた。声色もいつもどおりに戻っている。

「本当は、前のやつに乗りたくて走っただけだね。仕方ないよ。」  
僕は、老人を助けたことに少々気をよくしていた。僕の表情や口調はいつもより晴れ晴れと明るいものになっていた。

「何をそんなに急いでいたの？」

彼女はどうかやら、僕の行動に興味を示したのか、質問をしてきた。「実は、今日の昼に俺の姉さんに子供が生まれんだ。早く赤ちゃんの顔見たくて。うれしくてさ。」

「おめでとう。」

彼女の祝いの言葉は、和みを与えるものが含まれてあった。

電車は、乗り始めてから3駅目にやってきた。

「じゃあ、俺はここで降りるね。」

僕は彼女にそういったが、彼女は頷くこともなく、何の言葉も返されなかった。僕は電車から降り、改札へ向かう階段へ向かって歩き出した。その階段の方向と電車の進行方向が同じで、走り出していた電車を歩きながら見送った。

（あれ？ 気のせいかな？ 手振ってたな。いや、気のせいだろう。）

一瞬、彼女が僕に向かって列車の中で、小さく手を振ったように見えたが、彼女の姿も一瞬しか見えなかった。

僕は、改札を抜けるまで考えたが、結局有り得ないと思い、自分の気のせいだと結論付けた。

それはそうと、急がねば。僕は、また走り出した。

## 7 美栄(1)

私は今、壁にぶち当たっていた。

ある日、赤木という、転校生がやってきた。私はそんな彼女に不自由な思いをさせないためにも、クラス委員として、何かと気にかけるように心がけた。しかし、そんな私の思いとは裏腹に、彼女は挨拶こそしてくれるが、それ以上には、何も話には付き合ってはくれず、私は嫌われているのかと思うほどつれない態度である。

私だけじゃない、クラスの皆も、彼女に声をかけたが、彼女と仲良くなつたものはいない。

ただ、一人は除く。

工藤誠一。彼だけは、なぜか最近、彼女と時折話をしているように思える。

どうして?! 私には疑問だった。誠一は、1つ歳が上という立場であったが、それ以外は、特別なところはない。成績はそこそこで、運動は並以上、ルックスだって際立っていいものでもないし、右耳がなんかぶっくり餃子のように膨れてて気持ち悪い。性格として、一年少々の付き合いの中でわかってしていることは、暗くはないが、決して前に出るような明るい性格でもなければ、面白みのある話術を持っているわけでもない。

それに比べ私は、成績だって、テストのたびに上位だし、社交性だってある。友達だって男女問わず多くいて、そんな皆が私をクラス委員にと推してくれた。そしてクラス委員として、このクラスを

引つ張つてきたという自負もあるし、それが何より私の役目だと思つてきた。皆が皆、私を必要としてくれている。

誠一は、1つ上の年長者として、クラスの皆から少なからず一目おかれる人物であるかも知れない。そんな誠一に私も時折、頼るところもあるが、逆に誠一も私に頼ってくれるときもある。だからこそ、正直面白くない。

こんなことを思っていることがいけないの？

それとも私そのものがいけないの？

私自身、客観的に見たら、いきがったおせっかいの塊の嫌な女と思われてしまうかもしれない。だけど、これが私。皆が認めてくれている私。その中には誠一だって含まれている。他の皆だって、私と同じで彼女に相手にされていない。私だけが例外というわけじゃないだろう？ それとも、彼女と誠一の間には何かあるのか？

……男女の仲で何か特別なことが？

こんなことを、ずっと思い悩んでいた。

明日、先生に相談してみよう。それとこんな状況で少しためらいがあるけど誠一にも……。

「誠一。」

昼休みに、僕は一人、屋上で昼食を取っていた。今はまだまだ残暑がきつく屋外では、バカらしく思われるかもしれない。ただ、教室の中だって、冷房が完備されているわけでもなく、他の連中がいるためか、室内は室内でかなり暑い。しかしここには、心地よい風も、日陰もある。だから去年から僕は、この屋上の隅で、昼休みを和やかに過していた。普段はあまり他の連中は来ることがないこの屋上だが、今日は、一人僕を訪ねてきた生徒がいた。同じクラスのクラス委員「佐々木美栄」だ。

「美栄か。どうした。珍しいな、こんなところにくるなんて。」

「まあ、いいじゃない、たまには。……ここって、いい風が吹いて気持ちいいのね。」

美栄は、屋上の隅に座り込んだ僕の横に並ぶように立ち、西側から吹く風に目を細め、その風に少々乱されていた髪をしきりに整えようとしていた。

僕は、そんな美栄のことを見つめていた。彼女はいつも元気で明るく、笑顔が絶えない。しかし、今は、表情から思いつめたように思えた。あまり見ない美栄の表情に僕はその時、哀愁の念を抱いた。

僕は、何か彼女が問題を抱え思い悩んでいるのではないかと感じ、話を切り出した。

「どうした？」

「考えるのに疲れちゃって。」

「どうした？美栄らしくないぞ。俺に話してみたらどうだ。そのつもりでここにきたんだろう？」

しばらく沈黙があった。彼女は思いつめた様子で、ゆっくりと目を閉じ、そして再びその目が開かれた時、彼女は僕の方に目を向けて話しかけてきた。

「誠一って、最近、赤木さんと仲いいんだね。」

彼女の声には覇気がない。しかし、なぜそんなことを聞くのだろう？ 僕にはわからなかった。

「仲いいって訳じゃないさ。ただ、赤木さん、まだ誰とも仲良くないってないだろう？ おまえもそのこと気にしていたじゃないか。」

「……そうだけど。誠一って、自分から話しかけるタイプじゃないし、他の皆に対しても、率先して仲良くなつたわけじゃないじゃない。それなのに、なんで赤木さんだけ……。赤木さんだって、私や皆に対してはつれないのに、誠一だけには、態度が違うじゃない！」

「それは……。」

「好きなの？」

思いもしなかったことを美栄に言われた。もちろん、そんな感情もって、赤木に近づいているわけじゃない。だが、正直、なんで彼

女に近づいたのか、先生に言われたからそうしたが、本当はそうじゃない気がする。でも、僕は、その真意が僕自身にもわからなかった。

「そんなんじゃない！ 俺は、彼女のこと、何も知らないんだぞ！ それに、俺だって、おまえや皆と変わらない。話をして一言一言、好きかどうか以前の問題だ。」

なぜだかわからないが、僕の言葉には、照れくささがあった。いわば、強がった感じもある。

「むきになってる。」

美栄の目は、僕の方をまっすぐ見据えている。その目には、人を蔑むような冷たさがあった。

「むきになっているわけじゃない。おまえが変なこと言い出すからだろう。」

「どうせ、男なんて、下心をもって、女に近づいているんだものね。誠一は違うと思っていたけど、一緒なんだね。」

彼女は僕をそう罵った。もはや僕らの会話は、維持の張り合いだけで喧嘩をする子供のようだ。

「美栄、おまえ……。そんなことで悩んでいたのか？」

「違うわよ！……誠一のバカ！！」

彼女はそういい捨てると、駆け足で僕の前から立ち去っていった。

彼女自身が、何で悩み思いつめていたのかは、わからなかった。

しかし、今の僕らの会話の中に、彼女を苦しめている何かはあった

のかもしれない。でも、そのときの僕は、根拠のない罵りを受け、正直腹が立った。今は、考えるだけ無駄だろう。そう思った。

ホント、何なんだよ?! 女ってわからないな。

## 9 美栄(2)

「先生。ちよつとよろしいでしょうか？」

私は、放課後、担任の先生に相談してきた。

「どうした？ 佐々木く、元気ないじゃない？」

先生は、私が訪れるまで、机に向かい事務仕事をしていたようだった。右手にはボールペンが握られ、私の声に振り返って答えるという状況だった。

「実は、相談したいことがあります・・・。」

「なんだ？ 恋の悩みか？ いいぞ、先生も高校生の頃は、よく恋に悩んだもんだ。」

先生は、私の思いつめた表情をみて、元気付けようとしてくれたのか、もちろん冗談だと思われるような口調で言ってきた。

「先生。それセクハラになりますよ。それに恋で悩んでるんじゃないし！」

私は、冗談だと思いつつも、今は笑えない状態で、むしろそのセリフにイラついた。

「そうか?! 申し訳ない。それで、一体どうしたんだ？」

先生は、やりすぎたと思ったらしく、本当に申し訳なさそうに、冗談口調から、穏やかな口調になった。

私は、一連の流れと、ここ数日、思い悩んでいたことを話した。昼の誠一とのやり取りについては、とりあえず伏せた。先生は、私

の話真剣な面持ちで聞き、終わると腕を組みながら、考え込んでいた。

「佐々木、申し訳ない。」

「それって、どういう意味ですか？」

「実は、私も赤木さんのことは、心配していたんだ。本来なら、真つ先にお前に相談するべきだったんだが……。」

「私に？」

「そうだ、生徒のことは生徒同士で何とかするもんだ。それが一番いいとも思っている。教師である私が変に出て捏ね繰りまわすのもどうかと思うしな。それで……。」

「それで？」

「私も考えたんだが、このことは、工藤に頼んだんだよ。」

「誠……、にですか？」

「そうだ。」

「でも、何で彼なんですか？」

先生は私の問いに、困った様子だ。話そうか話さないか、そのどちらかで迷っていたように思える。

頭を掻き、何か小声でブツブツ言っている。

「あー！！ わかった、お前にも言おう！ 工藤にはもう話をしてある。赤木さんはなく、工藤と同じ年だ。当初お前を始めとした女子連中が仲良くなるもんだと思っていたんだが、女子どころか男子ともそうはならなかった。だから、安易なこととは考えたが、同い年ということで工藤には私の方から、無理にお願いする格好となつたんだよ。」

急に吹っ切れたか、先生は、自分の中にあつて、話すことをためらっていたすべての内容をぶちまけた感じに、早い口調で話をした。

先生の話聞き、私は誠一のことを考えた。

「そういう経緯があつたんですか・・・。」

「その後、工藤はどうなんだ？ 赤木さんとは仲良くなつたのか？」

「私の見る限りでは、他の皆より彼女に近い位置にいる存在になりつつあるように見えます。」

私は、私の目線で感じたとおりに先生に正直に答えた。

「そうか。それはよかった。私の考えも満更でもなかったんだな。」

先生は、腕を組み、うなずきながら、つぶやいていた。どうやら思惑通りといったところで、その表情には、勝ち誇った満足感があつた。

「本当にそうでしょうか？」

「どづいつことだ？」

「彼一人仲良くなったところで、赤木さんは、それ以上は求めないかもしれない。一人理解者がいることで、気持ちはだいぶ楽になったりして、他の皆には今までどおりと変わらない距離感で終わってしまうかもしれないよ。」

私は、先生の考えが正しいとは思えなかった。赤木は、考えている以上にもっと複雑な存在だと思っていたからだ。もちろん、根拠はない。あくまでも私の感覚にすぎない。

「そうならないために、工藤には上手くことが運ぶように頼んだのだが……。佐々木、お前からみて、工藤にはそこまでは期待しない方がいいか？」

「わかりません。なにせ、赤木さん自体誰も未だに何もわからないようなもんですから。でも、誠一人では、負担が大きいかもかもしれませんね。私たちより、1つ上だからといって、まだまだ、世間的には子供ですから。」

「そうか。」

先生は、私の言葉を受け、さつきとは逆に残念な面持ちだった。

しばらく、先生は考えていた。うん、うんと唸る声が聞こえてくる。すると、突然先生は目を見開き、そうだ！と声を上げた。

「どづだろづ？ 佐々木、工藤がいい流れを掴みつつあるんだろづ？ 流れを掴んだとき、お前が手を差し伸べてくれないか？」

「私が？ 私にはできません！」

「どうしてだ？ お前はクラス委員としても、十分立派だ。私も随分助けてもらった。お前のことを信頼しているつもりだ。」

「私は先生が考えているような人間じゃありません。失礼します。」  
私は、先生にそう反論し、先生の前から逃げるように立ち去った。

「ちよつと、佐々木。」

誠一が赤木に近づいていった経緯はわかった。だけど、私には、それだけで納得できない。

何で？ 何でなの？ 何で赤木さんに私や誠一、先生までも振り回されているの？

私の周りの環境は、彼女の転校によって少しずつ乱されているように思った。だからといって私は、今どうして意地になったり、落ち込んだりするのだろうか？

もう、嫌だ！ 何もかもがわからなくなってきた。これ以上何も考えたくない！

そんな中でも、私は思うことがあった。今度、誠一にはちゃんと謝らなければならぬと。

その日は金曜日の放課後で、昼間の晴れ晴れとした天気から一転、空からは雨がパラパラとちらついていた。勢いは強くないが、数分歩いただけで濡れることは必至だ。

僕は、天気予報も見えていなかったせいで、傘を持ってこなかった。しかし、この程度の雨ならば、傘の必要はないと、考えたが、電車に乗る手前、濡れた状態では乗車したくない。バスに乗って、駅まで行く手も考えたが、今日に限っては、特に急ぐ用事もない。

僕は、下足場でこの雨について悩んでいた。

晴れないかな。と思いつながら空を見上げていた。その僕の、横を他の生徒たちは通り過ぎていく。その姿を幾度となく見送り、やっぱり僕もここは、走って駅まで行くしかないかと思つた。

ふと、横に気配を感じ、横を振り向いた。そこには、赤木紗耶香の姿があつた。

「赤木さん?!」

いつの間にかいたのだろうか?僕はあからさまに驚いた!といった感じで彼女へ声をかけた。

彼女は、僕の声に気が付き、こちらを向いた。彼女もまた、僕が声をかけるまで、空を見上げていたようだ。

「赤木さん、珍しいね。いつもならとっくに帰っているのに。」

「今日は、掃除当番だったから。」彼女は淡々と答えた。  
「そうなのかと思っただけで、なかなか次の言葉を見つけ出せ  
ずいた。」

僕は、再び空を見上げた。まだ、雨は降っている。しばらく沈黙  
が続く。沈黙を打破するに一番いい、話題がある。営業マンなん  
かもネタ切れの際は決まって使うほど、場をつなぐには鉄板とも  
言える。

天候の話題だ。しかし、今雨降っていることは一目瞭然。「雨降  
っているね」なんて当然言えっこない。今の場合は、僕らが共通  
して思うことを話の切り出しに使うことが正解だ。

「雨止まないね。」

「工藤君は帰らないの？ この程度の雨、男の子なら気にしない  
じゃない？」

彼女もまた、何人もの生徒が、この雨の中へ果敢にも切り込んで  
いく姿を見ている。それなのになんで？ と思ったのだろうか。

「そうは言っても、濡れたままで電車に乗ったら他の人に迷惑か  
かるから。まあ、ただの夕立さ、そのうち止むよ。」

濡れるのが嫌なんじゃない。他人もどうでもいい、僕自身が濡れ  
たままで電車に乗りたくない。それだけのことだ。

「それもそうね。」

「赤木さん、傘ないの？」

そこで、思い出したように聞いてみた。

「ええ。持って来なかった。」

こんなことを思うのはおかしいかもしれない。僕の勝手なイメージだが彼女が完璧とかちゃんとした性格と思いついていた。僕とは違い、前の日天気予報をチェックし、寝る前には次の日の時間割を見て準備をし、床につく。そう、いわば、模範的な学生の習慣を彼女が身につけていると。どうやら、僕の過剰なイメージに過ぎなかったようだ。

「赤木さんこそ急いでるんじゃない？ 今日もあるところに行くんでしょ？」

僕は彼女の行動パターンを思い聞いてみた。

「今日は、お休み。」

休み？ 何が休みなんだよ？ やはりあそこのビルのが僕は気になっていた。

「そうなんだ……。」

そしてまた、しばらく、僕らは無言のまま空を見上げた。うつすらとではあったが、雲が東へ流れていく、西か青空が覗いていた。やはり、ただの夕立だったみたいだ。

「あ、雨が止んだ。」

僕は、屋根のかかっている場所まで数歩歩き、両手をかざしながら雨が降っていないことを確認し、彼女の顔を見て、笑顔でその言葉を放った。

「じゃあ、帰りましょう。」

彼女も一瞬、空を見て、大丈夫だと確認し、僕の顔を覗いながら僕にそう言ってきた。そして、校門へ向かい彼女は歩き出した。

帰りましょう。確かに彼女は僕にそう言ったのだ。

「そうだね。」

僕は、ちよっと困った。そんなことを言われるとは思ってもいなかったからだ。

歩き出した彼女を、僕は慌てて追いかけた。

駅までの途中で、僕は、どうしても気になったことを、聞くことにした。彼女は、絶対に話したがらないだろう。もちろん、僕には関係のないことで、それを知る権利などもない。彼女にとっても、僕に教える義理もない。ただ、どうしても気になる。ただ知りたい。興味本位なだけだ。ここ数日で、僕は、赤木に少しずつ近づいているような気がした。だからこそ、湧いてきた興味だったかもしれない。

駅に着き電車に乗って、それから聞くことにした。また、彼女は僕の隣に座っていて、早くも視線が反対側の車窓の方、一点に注がれていた。

「赤木さん。やっぱり俺、気になることがあるんだ。」

彼女は、僕の方を振り向くわけでもなく、僕の言葉を聞き流したように無反応だった。僕は、彼女の反応を得ずそのまま質問をすることにした。

「あのビルで何をしているかってことなんだけど？」

僕の問いに彼女は僕の方を振り向いた。その目は鋭かった。やはり、彼女にとつては深入りしてほしくない事柄なのか。

「あそこまで見ちゃったら気になって。」

僕は、彼女のその表情に圧倒され、目をあわせられなかった。

「なんで？」

彼女の言葉は、意外にも穏やかなものだった。

「なんでって、うん、わざわざ急いで下校して、それにほぼ毎日通っているんでしょ？ 何が赤木さんをそこまでさせているのかって感じかな？」

僕は、本当に馬鹿だった。聞くには、やはり、もっともらしい理由を作るべきだった。勇み足が過ぎた。僕は、彼女の問いに焦り、答えながら後悔していた。

彼女は、ため息をした。すると、鞆の中から財布らしきものを出した。

その中から、さらに何かを取り出し、僕に差し出してきた。

「はい、これ。」

彼女の手には、一枚の厚い色紙の紙切れのようなものがあった。僕はそれを受け取り、まじまじと見つめた。そこで、僕は、この紙切れが、何なのかわかったような気がした。

「これって………チケット？」

「そう。今度私も出演するの。」

「ジャズダンス？ 赤木さん、ダンスやっているの？」  
チケットには、「ジャズダンス」TAKI 定例発表会」と書かれていた。どうやら自主公演らしく、手作り感がこのチケットからにじみ出ている。発表会は再来週の日曜日だろうだ。

「ええ。」

あのビルに私が通っているダンススクールがあるのよ。」

「そうだったんだ。でも、なんで隠す必要が？」

「ダンスってまだまだ認知されていない所があるでしょ？ だから恥ずかしかったのかも知れない。それに、敢えて話すこともないかかって思って、誰もダンスには興味ないでしょ？ 工藤君も。」

彼女は、少し照れていたようだ、ダンスをやっていることは、僕から見たら純粹にすごいことだと思った。ただ、僕が興味があったかといわれれば、それを考えたこともない。彼女の言うことは正解だったかも知れない。

彼女の話を受け、僕にもあながち関係のない話とはいえなかった。僕もまた、彼女やクラスの皆に話していないことがあったからだ。恥ずかしいということとは僕も同意する。僕のやっていることは、将来に不安があり、世間的に建前としては、一目おかれているが、現実的になんてやっているの？ 危険だからやめたら？ 色々と批判されることが多い。だからこそ僕も、敢えて人に話すことをためらっていた。

「これ、もらってもいいかな？」

僕は、チケットを握り締め彼女に聞いた。

「いいわよ。」

彼女は、快諾してくれた。その表情には、やはりまだ照れが見え隠れしている。

「ありがとう。絶対に観に行くよ。」

これは、彼女の本当の姿を拝む絶好のチャンスだと思った。それと僕は何より、彼女からこのチケットをもらったことが嬉しかった。でも、ジャズダンスってなんだろう？ ヒップホップとか社交ダンスならわかるんだけど。百聞は一見になんとやら・・・僕は、彼女の公演を楽しみに待つことにした。

「この発表会、近いのに今日休みで大丈夫なの？」

「先生が、今日その公演の打ち合わせでいないの。それに、毎日練習したからいいって訳じゃない。ダンスも一種のスポーツよ。身体が資本。適度に休んで体調も整えることが必要なの。」

「そうだね。練習しまくって追い込んでも満足するのは自分自身だけだもんね。」

僕の家は乗車した駅から5駅目のところだ。僕も今日用事があれば3駅目で降りるところだが、その用事もないので今日はまっすぐ帰ってきた。ビックリしたことは、彼女も住んでいる家は、この駅から程近い場所にあるという。当然、駅から降りても、僕らは一緒だった。

僕は、まだ尚チケットを握り締め浮かれていた。

「そんなに嬉しい？」

「嬉しいよ！ だって、こういうの初めてなんだ。赤木さんの言うとおり俺、ダンスのことはよくわかんないけど、今は純粹に観たいし、興味が出てきた！ 楽しみなんだよ！」

自分でもバカだと思う。18になろうとしている高校生が、子供が初めて好きなヒーローやアニメの映画に連れて行ってもらうときのようなウキウキ感を抱いていたからだ。まだまだ、自分も幼稚なようだ。

「工藤君って子供みたいな顔するのね。」

僕はドキツとした。やはり、自分でも思うことは他の人にもそう思われていたらしい。

「そ、そうかな？」

僕は、頭をかきながらちよつと恥ずかしがってしまった。

「誠——！」

僕らは、駅前から少し離れたところにある商店街まできた。その商店街は、僕も小さい頃から馴染みがあるため、この辺では顔見知りが多い。ちよつと離れたところから、八百屋のオジサンが手を振りながら僕に叫んできた。

「おじさん——！」

僕もオジサンの叫び声に手を振って応えた。

「女連れでいいご身分だな——！」

確かに、女の子と一緒にこの商店街を歩いたこともない。おじさんも珍しかったのか、僕をからかってきた。

「何言ってるんだよ！ おじさん、さっさと仕事しろ〜！！」

僕は、隣にいる赤木を見れなかった。恥ずかしかった。それに、彼女の反応を見るのが少々怖かったからだ。

「初戦決まったんだらう？ 俺も、うちの母ちゃんと応援しに行くからな〜！」

「う、うん。ありがとう！」

僕はオジサンの言葉に応えるのを一瞬ためらった。

商店街を抜けたところで、別々の方向になるということで、そこで赤木と別れることにした。

僕は、てっきり先ほどのオジサンの言葉について何か聞いてくるもんだと思っていたので少々困惑していたが、そうはならなかった。

「さようなら。また明日。」

彼女は何も触れないまま、僕の家の方角とは違う方向へ歩き出していった。

「さようなら。」

そうつぶやくように去り行く彼女の背中に言葉を返した。

僕は、啞然としていた。

赤木さん。明日は休みですよ。

私はいったい何をしているんだろう？

私は、好奇心を罪悪感が今入り混じっている状態にいる。

金曜の放課後、先生に相談した後、誠一に昼での私の悪態について謝ろうと思った。しかし、彼はすでに帰ったに違いない。そう思い込んでいた。だが、彼は、下足場にいた。

私は、その時、彼に話しかけようと思った。しかし、彼の隣には赤木紗耶香の姿があった。私は、彼女の姿に気が付き、反射的に身を下足棚に身を隠した。二人は、何やら断続的ではあったが時折、会話をしているようだった。

私、どうして隠れているの？ バカみたい。

そう思いながらも、私は、依然として身体を動かさずにいた。それもそうだ、赤木紗耶香が原因で私は、誠一にとっても悪いことを言ってしまった。だから、今のタイミングで謝るなんてできっこない。

しばらくして、いつの間にか降っていた雨が止んだ。すると、二人は、一緒に下校し始めた。私は、何も考えることなく、二人の後をつけていた。

少し離れながら、二人の後ろを時々身を隠しながらつけた。二人の会話は聞こえない。

何を話しているのだろうか？

私は、そんな二人の会話がとても気になっていた。

私の家は、学校から徒歩で約15分くらいのところにあるが、私

は、二人が乗った電車に今、乗り込んでいた。帰宅ラッシュがまだなの、電車は、適度に空いていた。私は、二人の乗った車両の隣の車両に乗っている。連結部のドアの窓越しに、二人には気付かれないよう注意を払いながら、観察した。特に二人の会話が盛り上がっている様子もなかった。二人が付き合っていると、以前そんなことを考えた自分がバカ臭かった。どうみても、そんな関係には見えない。

電車が4駅目を過ぎた頃、赤木は、誠一に何か紙切れのようなものを手渡していた。

何だろう？

それが一体なんなの、この距離では確認できなかった。

5駅目に来たとき、二人は電車を降りた。駅構内からでも二人は同じ方向へ歩んでいた。私も、まだ二人をつけていた。

この町は、誠一が小さい頃から住んでいる町で、誠一の実家もある。私は一度だけ過去に誠一の家を訪れたことがあったので知っている。そのときは、誠一が急病で学校を休み、クラス委員として、課題のプリントを届けただけだった……。

二人は、やがて商店街へと入っていった。この先を通り抜ければ誠一の実家に行くことはわかってしている。しかし、なぜだろう？ 赤木もまだ誠一と行動をともしにしていた。彼女の家は、住所も知らないのどこにあるかわからなかった。この町に住んでいたとしたら、納得がいく光景とも言える。だが、もしそうではなかったらと考えると、私の眉間には力が入っていた。

「誠一〜！」

どこからか彼の名を叫ぶ声が聞こえた。私は彼を見た。彼は、そ

の聲がどこから発せられたのか、わからず辺りをキョロキョロしていた。私は彼のそんな姿をみて、すかさず身を近くの薬局の前にあつた看板に隠した。

私は、ドキドキしていた。

やはりこんなことをするべきではなかった。

先ほどの好奇心は、いまや100パーセントの罪悪感の念に変わっていた。

誠一と、誰かもわからぬ彼を呼ぶ声の主は、その後も互いに叫びあいながら会話をしていた。その中で、気になるフレーズがあった。

試合？

私にはその意味がわからなかった。誠一は、運動部はおろかクラブにも所属していないはず。それなのに試合とは何のことなのか？

やがて、その会話は終わり、再び二人は歩き出した。

商店街をちょうど抜けた辺り、ちょうどそこは人気も薄れたところで、二人は、道の真ん中で立ち止まっていた。私は、一気に二人の近くにまで迫っていった。二人の話す声がここでは聞こえる。私は気配を殺しながら、会話の内容を盗み聞きしてしまった。その行為をしたことよって私は、とんでもなく後悔した。

また明日。

赤木は、小さい声だったが確かに誠一にそういった。明日は学校が休みのはずなのに、二人は休日会う約束をしていたのだ。

私は、その場から立ち去った。その後の二人を見送るのをためらったからだ。今来た道をうつむきながらトボトボと歩いた。

やっぱり、あの二人は付き合っていたんだ。それでなくとも二

人は、もうかなり親密な関係に間違いない。  
そう思った私の頬に、一筋の涙が流れた。

なんで？

私には不思議でならなかった。その後も涙が止まらず、とうとう私は、道の片隅でしゃがみこみ泣いた。

泣いていたときに、私はついに気がついてしまったんだろう？  
工藤誠一という男が男として好きなんだと。それが、赤木紗耶香という、私以外の女に取られてしまう。でも、そのときの私は、今後どうしたら良いかわからなかった。今はただ、この悲しい気持ちが行先して、そんなことを考えられなかった。

私が、誠一にとった悪態も、赤木に抱いていた感情も、すべては私自身の嫉妬が引き起こしていた結果だったのだ。

「もしもし。」

次の日の土曜日に、僕の携帯電話に着信があった。相手は、美栄からだった。

「美栄。どうした？」

「特に用事はないんだけど、何してたかなって。」

美栄から休日電話があることなんて、今までになかったが、よく考えれば、なかつたことも意外な感じする。

「特に、何にもしていない。」

「用事とかないの、今日は？」

「ああ、ないね。何しようかとも考えていない。」

「そうなの？ 意外。」

「意外って、何だよ？」

「ううん、なんでもないので。じゃあさ、今日ちょっとこれからどこかに遊びに行かない？」

「ああ、いいよ。こんなにいい天気なのに出かけないのももったいないし、ちょうどいいや。」

僕は、今から1時間後の12時に学校の最寄にある駅前で会う約束をした。天気もよく、僕の部屋の窓からは、心地よい風が入ってきていた。僕は、特にアウトドアな気分でもないが、用事も予定もないが外に出なくてはもったいない気がした。

12時ちょうどに、美栄はやってきた。休日、美栄とあったことがないせいか、彼女の私服姿が、新鮮に思えた。デニム生地の子ニスカートにスワロフスキーで装飾されたミュール、上半身は肩口まで大きく開けられた黄色のTシャツ。髪型は、いつもと変わらないが、彼女の顔は、化粧が施されていて、彼女の可愛い別的一面

を除かせていた。僕は、彼女の姿を、見て、あっけにとられていた。

「お待たせ。どうしたの？」

「ああ、いや……。」

「なんか変なの。」

「ああ。」

「じゃあ、もうお昼だし、ランチに行こうか。」

「ああ。」

いつもの制服姿からは想像もしえない彼女の姿に僕は、少し恥ずかしさがあった。これならもっと考えて着てくる服を選んでくるべきだったな。

僕は、駅近くのコーヒーショップに入り、僕はアイスコーヒーとチーストースト、美栄は、ホットのカフェ・ラテとベジタブルサンドを注文し、僕は、屋外のテーブル席に腰を下ろした。

「今日は、いい天気ね。」

「ああ。」

「……ちよっと！ さっきから誠一、ああしか言っていないじゃない？」

「ああ。」

「もうまったく、どうしたっていつの？」

僕は美栄のその言葉を受け、我に返った。

「すまんすまん。びっくりしたから。」

「何に、びっくりしたのよ？」

「いや……ほら。美栄の学校以外で会うなんて初めてだったから。」

「それって、どういう意味？」

「何だろう。緊張しちゃって。」

僕の言葉に美栄は、顔を赤らめた。

「ちょ、ちょっと。変なこと言わないでよ。恥ずかしくなってくるでしょ！ ……変かな？」

「いや！ 変じゃない。むしろ…。」

「むしろ？」

「なんていうか、可愛い。」

僕の言葉に、美栄はさつきより一段と顔を赤くした。

「ちょっと、からかわないでよ！」

「いや、冗談じゃなく、純粹にそう思った。美栄にも女の子らしいところあるんだな。」

「何よ、それじゃあ、いつもは女の子らしくないみたいじゃない。」

「

「そうかもな。」

「こらー！」

僕らそんなやり取りを終え、噴出したように笑いあった。いつもはこんな話題では笑うことはなかったかもしれない。そして僕は、安心した。この間のことで、彼女とは少し蟠りがあつた気がしていたからだ。彼女の笑顔は、そんな思いを吹き飛ばしてくれた。

軽めのランチを終え、僕らはゲームセンターへ行き、無邪気に遊んだ。その中でも、美栄は笑顔が絶えなかった。

ある程度のゲームをやった後、ゲームセンター内にあるボウリング場で僕らは、ボウリングをすることにした。僕は、ボウリングが得意だ。僕の父親は、趣味が行き過ぎてアマチュアスポーツボウラーで、地域のボウリング大会では、上位に入る常連だった。その、父の影響で、僕も幼い頃からボウリングに連れて行ってもらった。その甲斐もあって、ボウリングは好きだし、得意なスポーツでもある。

ボウリングは、集中力の鍛錬にはとてもいいスポーツだ。他にも、意外や意外、女性の美容と健康にも最近一目置かれるスポーツとなっている。理由として、腕を集中的に使うスポーツと捉えられがち

なのだが、実際は、腕をあまり使わない。全身運動なのだ。イメージしているよりも、カロリー消費が高く、楽しく効率良く、ということに関して一番適しているスポーツなのかもしれない。

「よし！ 誠一、勝負だからね。」

美栄は、力みが出ている感じがした。力むと、イメージとはかけ離れた結果になり勝ちだが、これはあくまでも遊びだということを忘れてはいけない。

「美栄。あんまり、力むなよー！」

「うるさい、集中させて！」

美栄は、運動神経のいいほうだし、勉強も出来るから、集中力も申し分ないはずだ。僕は、彼女の第一投を後ろから、暖かく眺めることにした。

美栄は、1つ息を吐き、静かにアプローチに入った。彼女のフォームは、流れるようにとてもきれいで、やりなれた僕から見ても期待が持てる感じだった。が、四歩目、スライドしているとき、気がついた。彼女は、ミニスカートだった。彼女の、投げる姿に見入っていたために、短い丈のスカートの裾から、彼女の下着が見えてしまった。

ガコーン。

「やった〜！ いきなりストライク〜！」

美栄は、下着がチラ見してしまったことを知らずか、無邪気にストライクを喜んでいた。僕は、彼女の下着が見えたことに、気をとられてしまつて、啞然としていた。当然、彼女が、ハイタッチを要求してきた時の反応が一瞬遅れた。

「誠一？ どうしたの？」

美栄は、僕の様子に気づき、僕の顔を覗くように言葉を投げかけてきた。

「あ！？ なんだ、その。パンツが見えて・・・。」

僕の、言葉に、彼女は、顔を赤らめた。今にも、顔中の穴という

穴から湯気が出てきそうなほどだ。

「もうー！ バカー！」

2ゲームやり、結果は、当然僕の勝ちだったが、美栄のスコアは、アベレージとして140と、一般的は、やはりレベルは高いかもしれない。

「140か、私天才かな？」

「お前が、天才なら、俺は神の子だな。」

「うるさいな！ いいの女の子だから。」

本当にうれしかったのだろう。彼女は、丁寧にスコアシートを折りたたみ、バッグにしまいこんだ。

夕方近くになってから僕らは、駅近くの公園のベンチに座っていた。会話自体の内容はたいしたことなく、普段どおりのやり取りだと思っ。

「誠一。」

先ほどまでの、笑顔から美栄は、少しだけ真剣な面持ちへと変化していた。声のトーンも1つ下げた感じになっていた。

「何だ？」

「この間のことなんだけど。」

「その間のことって？」

「屋上でのこと。」

「ああ。あのことが、別に気にしてないぞ。」

「ううん、ちゃんと謝らなきゃなって思って。」

「そうか。」

「本当にごめん。」

「いいって、安心したし。」

「安心したって？」

「ああ。この間から、美栄、元気なかつたからさ。でも、今日お前が笑っている姿見て、安心したよ。」  
「そう。ありがとう。」

会話が終わり、一瞬だが、沈黙があつた。一瞬とはいえ、僕は、赤木のことを考えた。こんな沈黙は、赤木としか最近なかつたなと。赤木との沈黙は、必要不可欠なことで仕方ないと考えていたが、今は、美栄との間にある沈黙が、苦痛に近いものだと思つた。普段は、美栄自身、おしゃべり気質なため、本来はまるべきものが、上手にかみ合わないもどかしい感じの歯がゆさがあつた。それが苦痛ともとれるものになつていたのかもしれない。僕は、そんな苦痛に絶えられず、口火をきることにした。

「あのさ。」

「あのさ。」

僕と美栄の言葉がかぶつた。

「何？」

「いやいや、美栄こそ何だよ？」

「誠一、いいよ。」

「そうか？ いや、そろそろ暗くなつてきたし……帰るか？」

「そうね。」

「美栄の方は、なんだつたんだ？」

「うづん、いいの。さあ、帰ろ。」

美栄は、ベンチから立ち上がり、僕にそういつた。

「ああ。送るよ。」

「いいよ、近いし、まだ日が長くて明るいしさ。」

「そうか……」

僕は、その公園で別れた。僕は美栄の背中を見送つた。  
なぜだろう？ 彼女の背中には寂しい感じが漂つていた。その背

中に向かい僕は、声をかけずにはいられなかった。

「美栄ー！」

僕は、叫んだ。普段はあまり出さないだろう大声で。

美栄は、立ち止まってから振り返った。その表情は、驚きと疑問の面持ちだった。

「今日は、ありがとう！ 楽しかったぞー！」

美栄の表情は、僕の言葉を聴き、笑顔へと変わった。

美栄は、軽く手を振り、再び僕に背中を向け、歩き遠のいていった。

### 13 真の姿

次の日の日曜日、僕は、あるところへきていた。クラスの連中や、赤木、美栄にすら、このことを話したことはない。

「工藤。昨日ちゃんと休んだか？」

「ええ。気分転換もできたし、来月の試合までがんばりますよ。」

「当たり前だ。今日から気持ち切り替えてビシビシいくからな！」  
「押忍。」

実を言えば、僕には、今夢中になることがある。小さい頃から、野球やサッカー、バスケットなんかその時その時に、周りの友達なんかやっていたスポーツや、父親の影響でボウリングもやったが、僕には、どうもしっくりくるものがなかった。中学を卒業するちょっと前に、友人から、総合格闘技のDVDを借り、観た瞬間に衝撃を覚えた。何も道具を使わず、拳や足、いや体全体で、男同士が真剣勝負する姿に僕は、心が躍った。

今いるジムに通い始めたのは、それから1週間とかからなかった。むしろ、そのときのことはあまり記憶がない。無意識のうちに、ジムの門を叩いていたような気がする。

格闘技を始めるまで、喧嘩はおろか、人を殴ることすらしたことがなかった。もちろん、柔道やボクシングなどの一般的に格闘技に通ずるような武道やスポーツもやっていなかった。

始めた当初、母にはすごく反対された。ルールがあるとはいえ、他のスポーツを比べ、危険度はかなり高い。試合中や練習中の怪我は絶えず、下手したら、一生残る障害や最悪、死に至ることもある。自分の息子が、哀れな姿になることを極端に嫌ったのだろう。そんな時、父は反対せず、むしろ背中を押してくれた。

どんなスポーツでも真剣勝負となれば、命を懸ける。だから、危険も伴うが、男たるもの真剣勝負をしないまま生きていくことは、大きくはなれない。決めたことを納得するまでやり続けなさい。

時代劇好きの父らしい言葉だった。でも、そんな父を僕は、親として男として、人間としてとても尊敬している。母も、渋々だったが、父の言葉を受け、格闘技をやることを許してくれた。

危険なスポーツだし、それに懸ける選手の精神状態は並大抵ではない。だが、決して殺し合いではない。野生的本能を売りに戦う選手もいるが、むしろ常に冷静さが求められる。冷静さを保つため、精神力も半端なものではない。生半可な気持ちでできないのも格闘技だと思う。だからこそ、皆が皆、体のことを一番に考え取り組んでいると思う。

格闘技に取り組み、いくつか試合にも出てみた。もちろんアマチュアの試合だから、プロに比べて、危険度も低い。ヘッドギアもするので、なかなか、顔にあざを作りにくい。だから、今まで学校の連中などには、悟られなかった要因とも言えるだろう。

戦績は、8試合にこなし、勝つときもあれば、当然負けることもあった。けども、勝利の喜びより負けた悔しさが今でも残っている。その気持ちが、僕を練習へ取り組む糧になっているのだと思う。去年の暮れの頃に、行われた地方大会のトーナメントで僕は、優勝した。トーナメントといっても、実際は、3試合ほどしか行っていない。しかし、その優勝をきっかけに、来月、プロとしてのデビューにこぎつけた。

当初は、プロに関して、あまり関心がなく、目標にすることすらしていなかった。プロ転向の話を、会長にされたときには、一瞬ためらった。もちろん、危険がかなり高まってくる。しかし、会長はお前の年でプロの話が来るなんて、なかなかないことだからやるだけやってみろ、と言われ、プロになる決心をした。父は、プロになると言ったときに、とても喜んでくれた。母はというと、心配した面持ちで戸惑いも感じられたが、一言、気をつけなさいとだけ言うてくれた。

プロになると言うてからの練習は今までよりも厳しいものがあった。勝つための練習もそうだが、何より怪我をしないために練習す

るということが重点的になって言ったような気がする。アマチュア時代は、1発、2発殴られたところで、ビクともしないが、プロになれば、1発のパンチをもらっただけで、負けにつながるし、怪我を引き起こす可能性も高い。

「まだまだ！ しつかり、見る！ ガード下げんな！」

会長のミットめがけ、一心不乱に拳を打ち込んでいく。何発ミットを殴っただろう、疲れが1秒1秒時間が経過するたびに溜まっていく。だが、集中力を途切れさせてはいけない。一瞬でも途切れた場合、容赦なく会長のミットによる制裁が僕の下がったガードをいとも簡単にすり抜けて打ち込まれてくる。

総合格闘技は、はつきり言って、まだまだメジャーなスポーツと言えないだろう。たまに、テレビで試合の様子が中継されたりするが、一般的な認知度は低いだろう。

野蛮、危険。

そんな声がいつも僕の耳に入ってくる。しかし、その考えまで至るのはまだまだ、マシな方で、人によつては、ボクシング、キックボクシングと勘違いされがちだ。実際、八百屋のおじさんは、何度説明してもボクシングだと未だに思っている。

そんなこともあって、僕は今まで、クラスの連中に話していなかったのだと思う。何が楽しいの？ とか、痛くない？ とか、きつと根掘り葉掘り聞かれるだろう。それは、たぶん最初だけで、次第に考え方が変わり、あいつは危ない！ 怖い！ といわれるようになるだろう。もちろん、そんなことを言う連中だと思っではないが、時として何かのきっかけで距離をとってくるのも人間の姿だと思ふ。赤木の時を考えてもまったくのゼロに近い可能性とも言いがたい。クラスの連中はいいやつだ。だからこそ、今のままでいい。上辺だけの関係だといわれようが、今が楽しく過ごしているならあえて話す必要もないのかなと思っしてします。

赤木も僕の感情に似たものを感じていたのだろうか？ だからこそ、彼女も敢えて話す必要がないと思ってるのかもしれない。よくよく考えてみれば、そう捉えても不思議ではないような気がした。

「どうした！ どうしたー！ お前はこんなものかー？」  
会長の熱が最高潮に来ていた。僕はそれに応えるように自分の体力を申し分なく出していた。

ピー！

ジムにあるタイマーのアラームがなった。いつも、3分に設定されている。大体の試合が、1ラウンド3分で、それに自分の体内時計を日々の練習で合わせていく。ラウンドとラウンドの合間に1分挟み、これを繰り返し、限られた中での自己の回復能力も高める効果もある。

僕は、1分というインターバルの間に、色んなことを考えた。その中で、1つ結論を出した。

赤木を試合に誘おう。

断られるかもしれない。けども、彼女なら、こんな僕の姿を少しは理解してくれるに違いない。多分、彼女と僕は、似たような部分がある。せつかく、彼女の公演にも、誘われたし、そのお返しも兼ねるといふ建前ではあったが。

ピー！

「よし！ 工藤。次いくぞ！」

「はい！」

開館を前にして、会場の入り口に約100人程度の人だけりができていた。そして、僕は、その人だから少し離れていたところで、近所の商店街の花屋で作ってもらった花束を片手に孤立していた。

家を出てくる際に、母が持っていきなさいと言ったからだ。母曰く、ピアノの発表会では、発表者の友人が尊敬の意味を込め、花束を贈るものだ、といい、僕は渋々こしらえた。母の言うことも満更でたためではなかったように、何人かは花束を抱えていた。しかし、僕の持ってきた花束よりも、スケールが大きい。僕は自分の花束を見つめ、なんだか恥ずかしさがこみ上げていた。

僕が会場についてから約10分ほど時間が経ったぐらいに、会場の入り口の扉が開かれた。

先ほどまでできていた、人だけが、徐々に小さくなっていった。僕も、その様子を見守りつつ、空いたところで会場内へと足を運んだ。

今回の発表会に使われるのは、隣の県の中心部にあるところだった。よく、ミュージシャンや劇団公演も行われていて、会場自体も大きく広い。しかし、それらは、この会場の大ホールで行われることがほとんどで、今回の発表会は、それよりも規模が劣る中ホールで行われる。

中ホール入り口前には、大きな胡蝶蘭が飾られていた。関係者が支援者の名前らしき札が添えられていた。ますますもって、僕の花束が幼稚なものに思えてきた。

チケットを係員に渡し、スタンプを押してもらってから、入場した。中ホールとは言えど、最大収容数は500人ぐらいはできる会

場だろうと思う。僕の印象は、広いと思った。

ステージには、真紅の幕が下ろされており、すでに、会場の前の席には、先ほどの人だかりにいた人たちが、談笑しながら陣取っていた。

席はすべて自由席で、僕は、中間の列と一番後ろの列のちょうど中間の列の真ん中の席に腰を下ろした。映画を観るときもそうだが、間近で観るよりも、やや後ろで、全体を見渡す方がよいと考えていたからだ。しかし、だからと言って、前列が悪いということにはならない。演劇なんかでは前列に座ることにより演者の細かな表情を間近で見れるというメリットもある。けども、僕は、敢て後ろに座った。ジャズダンスというものをわかっていなかったからだ。表情よりも、全体像を観てみたいと思ったからだった。

僕が席に座ってから、人は増えていった。満員とまではいかないが、400人に少し足りないくらいだろうと思った。僕の周りにも人が座り始めていたが、予定時刻の5分前には、入ってくる人はまったくいなくなっていた。

「ご来場の皆様。本日は「ジャズダンス〜TAK〜 定例発表会」にお越しいただき、心より御礼申し上げます。

女性の声のアナウンスが会場へ響き渡った。その声は、ハスキーな声でとても色っぽい大人の女性を連想させた。

「ジャズダンスTAK」代表のミスキタカコです。この発表会のため、練習生は皆、つらい練習を積み重ねてまいりました。しかしながら、まだまだ未熟者ゆえに、いたらぬ部分があるかと思いますが、どうぞ温かい目で見守っていただければ幸いです。それでは、まもなく開演でございます。最後まで、どうぞお楽しみくださいませ。

アナウンスが終わると同時に、会場の照明からは明るさは消え、暗闇へと変貌していった。いよいよ、始まる。僕は、ドキドキしていた。もちろん、楽しみだという気持ちがそうさせている。

最初に、女性三人による公演が始まった。3人は、白のワンピースドレスを纏い、裸足で踊っていた。遠めからだったためか、しばらくたつてから彼女たちはどうやら中学生と感じた。表情の中から、あどけなさが漂い、背伸びをした感じに大人の女性を演じていると感じたからだった。

今流行の女性アイドルグループのバラード曲をBGMに踊り、歌詞の内容から創作されたのか、ダンス以外にも演技とも思いき動きが随所に表現されていた。

曲がサビの部分になれば、3人の動きは綺麗にシンクロし、小さな体でありながら、とても躍動感あふれた動きをしていた。

僕は、まだ始まって1組目の公演にもかかわらず、初めて肌で感じたダンスにとても驚き、圧倒されてしまっていた。

3人組の演技は終わり、ステージに当てられていたスポットライトの灯火は一度、明るさを失い、会場が暗闇となった。その中で、観客による賞賛の拍手が3人組に対して贈られていた。僕も、考えるよりも先に、拍手を激しく彼女たちに対し贈っていた。

そんな拍手の渦が鳴り止まない中、再びスポットライトの灯火は、ステージに向けて灯された。

次に出てきたのは、僕よりも2、3歳上だろうか？ 大学生風の色白で、背の高い男性だった。男性は、全身黒の装いで単独による公演だった。

先ほどの3人組とは違い、男性というポテンシャルを生かした、激しく、そして力強い動きだった。彼がBGMで使っていた曲は、僕も好きなロックバンドのやはりここでもバラード曲だった。この曲は、僕もよく聴いていたためか、とても思い入れがある。歌詞の

内容としては、別れた恋人の新しい恋を自らは身を引き、立ち去っていく内容だった。これだけの内容だととても哀しい感じになるが、最後には、自らも希望をもって新天地へ赴くという、とても前向きな内容で締めくくられる。

男性ダンサーの表情には、最初哀愁が漂っていたが、その表情は、なぜだか僕には同性にもかかわらず、色気を感じさせた。きっと、彼の、見た目が色白で且つ、細い体つきに手足の長さがそう錯覚させていたのだろう。

僕は近くにいた女性の観客のほうを向いた。彼女もまたそんな彼の色気に心を奪われていたのだろう、両手を胸の前で組み、その目は男性の方、ただ一点に集中し注がれているような感じだったからだ。

僕は、そんな男性ダンサーに嫉妬の念を次第に抱き始めていた。ステージ上で、尚且つ、初めて彼を見たに過ぎないが、僕が努力しても決して与えられることのない何かを彼は持っていたと思ったからだ。

その後、3組の公演があった。どの組の演者も体つきの小さい、幼い少女たちのものだった。

最初の2組とは違うのは、BGMの曲調がアップテンポのものを使用していたことだった。会場中の観客は皆、手拍子で彼女たちのダンスを盛り立て、振り付けの動きに未熟さが滲み出たと思っても、笑顔で声援を贈っていた。

前半の5組が終了した時点で、中休みの時間が15分ほど設けられた。僕は、5組目の途中から、トイレに駆け込むことを我慢していた。今思えば、あの雰囲気の中、席を立ち、会場を抜け出したとしても差し支えがなかったと思った。

トイレから、中ホール入り口へ戻る際、僕はあることに気がついた。僕と同等、もしくは、20代と思しき男性客の姿が、僕以外に

いないということだった。男性客がいないわけではない。だが、誰も、30代後半から40代以上と判断する人たちばかりだった。おそらくは、先ほどの、少女たちの家族に違いない。やはり、僕は場違いだったのかもしれない。

後半の部が始まった。僕は、中休みに受付にプログラムがあったのを知った。ようやく、僕は、この公演が全9組による編成が組まれていたことを知った。しかし、演者の名前は記載されておらず、演目名が箇条書きされているに過ぎない至ってシンプルなものだった。

1組、また1組の公演が終わっていく中、未だ赤木の出番までは回ってはこなかった。8組目の公演が始まった時にも、赤木の姿はない。どうやら最後の9組目に登場するようだ。

8組目が終わり、いよいよ最後の9組目の番だった。赤木はここで登場する。僕には、今まで以上の期待感があった。ここまでの演目はどれも素晴らしいと思った。初めて観たジャズダンスの公演だったが、何がどうこうではなく、率直に言葉では表すことができない感動を覚えていた。だからこそ、知り合いの赤木が情熱を注ぎ続けているであろう、このダンスで、どんなものを魅せてくれるのか、期待が大きく膨らむ。

ピアノのゆっくりとした旋律が、会場のスピーカーから流れてきた。僕は、そのメロディを聞いたことがある。そう、以前赤木が、ポータブルのMP3プレーヤーで聴いていた曲だった。このために聴いていたのかと僕は悟った。だとしたら、彼女の、この公演に対する意気込みは半端なものではない。

ステージ上には、2人の男女の姿があった。もちろん、女性の方は赤木。男性の方は、2番目に登場したあの男性だった。赤木は、真紅のドレスで、スカートの丈が、左右非対称だった。右から左下

に向け、切り落とされたような感じだ。僕は、頬を赤らめた。彼女の、女性としての魅力を感じさせる白い脚線美を見たためだ。まだまだ、僕も女性に対する抵抗力が弱いかもしれない。

2人は、寄り添ったところから、演技が始まった。ゆっくりとした曲調のためか、2人の動きは、とても緩やかだった。しかし、ダンスのダの字も知らない僕から見ても、彼女たちの実力は、少なくともこの公演に登場した、誰よりも1段も、2段も上に行くものを感じさせた。

手の指先、足の指先、細かな部分に至るまで、2人のダンスにはキレがあった。男性は、相変わらずも雄雄しく、そして赤木は、女性にしか出せない妖麗な動きを見せ、ダンスという手法をとりながら、2人は、曲の内容に添う演技を行っていた。

男女の、悲しい恋物語を歌った曲を見事に演じている。赤木の表情には笑みはない。悲しい表情。だが誰もが彼女の表情に魅せられている。僕も例外ではない。

時には、2人が、激しく抱き合い、かなりきわどく顔を近づけたりしていた。しかし、そんな様子に嫉妬を覚えている暇はなかった。サビで、2人はシンクロした動きを見せ、先ほどより、激しい動きをしていた。赤木のソロパートで、彼女がすばやく踊っているはずなのに、僕には、ゆっくりと動くように見えていた。彼女から発せられた汗一粒一粒まで見える感じがする。

4分30秒ほどの長くもない曲のはずなのに、とても長く感じた。またピアノの旋律とともに、終わった二人の演技に、僕は絶句していた。いや、僕だけじゃない。他の観客もまた、言葉にできずに、しばらく静寂が会場を包んでいたのだった。

やがて、誰かが口火を切ったように、二人を賞賛する拍手の渦が巻き起こった。今までの誰に対してもここまで大きい拍手は与えられなかっただろう。それは、ずっと鳴り止むことを知らぬまま、会場いっぱい響きわたっていた。拍手をする観客の中には、涙を浮

かべる者もいた、完全に情が入り込んだに違いない。しかし、その気持ちもわからなくもない。僕の、眼にも何か熱いものを感じたのだったから。

終了の挨拶を告げる、アナウンスで、拍手はやがて、だんだんと小さくなっていった。会場を後にしようとしている観客は、皆、満足そうな顔をしている。誰もが、話すことの内容は、そんな最後の演目についてだった。素晴らしい。感動した。綺麗だった。単純な言葉でしか言い表せないのは、僕だけではなかったようだった。

僕は、最後の方に会場を出ることにしていた。人がいなくなりつつある会場では未だに、あの拍手の余韻が残っている気がした。入り口前の列が短くなった時、僕は、席を立ち、会場を出た。

出たところで、僕は、廊下の奥から、数人が騒ぐ声を聴いた。僕は、声のする方向へ足を運ばせていた。だんだん、声に近づいていく。

声の主たちは、どうやら、今日の公演でダンスを踊った演者たちによるものだった。そこらは、控え室らしく、関係者たちなども含め、30人ほどの人ばかりが出来上がっていた。喜びを全身で表現する者、互いに抱き合って喜び合う者、皆さまさまざまな方法で喜びを分かちあっていた。

僕は、その中から、赤木の姿を見つけた。彼女もまた、喜びを抑えきれずに皆と分かち合っていた。しばらく、その様子を窺っていると、赤木がおもむろに僕の姿を発見し、こちらへ歩み寄ってきた。

「工藤君！ 観に来てくれたんだ。ありがとう。」彼女の顔は、今まで見たことのない、笑顔を見せていた。すると、彼女は、僕に抱きついてきた。僕の体は背中に針金を入れたように固まってしまった。彼女の体が触れたのを感じたとき、彼女の体がとても細く華奢

で、柔らかさを感じた。こんな体つきにも関わらず、あのダンスを踊る彼女にとっても凄みを感じた。

「赤木さん。凄かった！ 感動したよ！ なんか…… うまくいえないんだけど、とにかく凄かった！」

彼女の体が、僕の体から離れるのを見計らって、彼女に僕の素直な感想を述べた。僕もまた、興奮が冷めていない。つまらない感想しか言えなかった。

僕は、慌てながらも、持参した、今や貧相にしか見えない花束を、赤木に差し出した。

「あの。これ…… 本当に凄かった。」

「わあー、綺麗。嬉しい、ありがとう」

彼女は、まだ笑顔だった。いや、笑顔が途切れないのだろう。しかし、笑顔の中に、僕に抱きついたことに恥じらいを感じたのか、少々頬を赤くしているようにも見えた。視線は僕からずれ、花束を見つめていた。

「沙耶香ー！」

廊下の奥の方から、彼女を呼ぶ声がした。男の声だった。

「はい！ ごめん、行くね。連絡するから。」

彼女は、僕に軽く手を振り、声のした方へ向かっていった。

どうやら、彼女を呼ぶ声の主は、相手役の男性ダンサーだった。

僕は、頭がいいわけじゃないが、耳のよさだけは、自慢できるほどよかった。美栄にはよく「地獄耳」といわれていた。

そんな地獄耳が、その場から立ち去る際に、赤木と男性ダンサーの会話の断片を少しだけ捉えた。

あの男の子、誰？

学校の友達です。

僕は、嬉しかった。友達。ようやく、彼女に友達として、認められた。単純に嬉しかった。だからこそ、恥ずかしくて、その場から早く立ち去りたかった。

友達。会館をでて駅に向かう途中でも、赤木のその言葉を、僕は、その噛み締めた。顔は、当然気持ち悪いくらいにニヤついていたのだった。

しかし、1つだけ、気になることがあった。連絡するといっても、携帯電話の番号はおろか、メールアドレスも知らない。もちろん、家の電話番号だって知らない。今までを振り返り、なんとなく、彼女が、なかなか友達のいない性格だとわかりつつあった。

「工藤君。」

月曜日の授業も終わり、そそくさとジムへ向かうため、下足場で靴を履き替えていたときだった。僕を呼び止めるような声が僕の背中へ浴びせられた。声の主は、赤木だった。

「赤木さん。どうかしたの？」

僕の問いかけに、彼女は一瞬口ごもったが、それはいつものような躊躇いを感じさせるものではなく、一呼吸間をあけた、そんな感じだった。

「この間は、その……ありがとう、観に来てくれて。」

「いやいや、本当によかったよ。いいものを見せてくれた。そんな感じだよ。」

「ちよつとだけ、いい？」

赤木は場が悪いのかと思ったのか、周囲を気にするように見渡しながらいよいよ放った。

「うん、いいよ。だけど、用事があるから、帰りながらもいい？」

「ええ。それでかまわないわ。」

僕らは、また一緒に下校することになったわけだが、いつもと違うのは、僕からの意図ではなく、赤木から誘いがあったという場面が作られていることだ。

「初めてだったの……。」

何をいきなり言い出すのかと、僕は驚いて、彼女の顔を見た。

「な、何が？」

「初めて、友達に私のダンスを見せたの。」

「そのことか……。」「僕はボソッと口から独り言をこぼしてしまった。」

「どづいこと？」

「いやいや、なんでもない。そうなの？前のところとかでも友達に見せたことなかったの？」

初めてだったのなんてセリフは、いい年頃の男女がするとちよつと違うように聞こえてしまうからか、別の意味で捉えてしまった自分自身に恥じらいを覚えた。

「ええ。今みたいに前の学校でも、ダンスをしていることは誰にも言わなかった。皆、学校では、ファッションのこととか、好きな芸能人の話、恋愛の話。ごくごく普通のことだけれど、私がダンスをしていることを話すと、この子は、何か違うとか、そういう偏見をもたれると思ったの。」

「なるほど。つまりは、赤木さんって恥ずかしがり屋？」

純粹に思っただけのことだった。彼女は、核心をつかれたのか、顔をうつむき、長い髪の内からは頬が赤みがかっているのがわかった。「それは、ひとつの理由ではないと思う。」

「じゃあさ、ひとつ聞くけど、何で俺を誘ってくれたの？」

「それは、このままではいけないと思ったからかな。それに工藤君は、何かと私を気にしてくれていたみたいだし、それに、私がダンスをしていることを口外しないって約束してくれたから。」

「そうか。はじめの一步ってことか。」

「でも、よかった。本当は怖かったの。私が踊っている姿を見て、友達がどう思うのか？でも、工藤君は、よかったって言ってくれたし、お世辞でも嬉しかった。それを聞いて、私もダンスしていいよかったです、心の底から思えたから。」

依然として、彼女は僕の顔を見ることなく、うつむいたまま話をしていた。

「ところでき。この間のお礼がしたいんだけど。」

「お礼？何で？お礼をしなきゃならないのは私のほうよ。」

「いやいや、あれだけいいものを見せてもらったんだから、そのお返し。大したもんじゃない。」

僕は、彼女を制止するように自分の胸の前で両手を広げ、話を先に進めた。

「赤木さんは、自分がダンスをしていることを俺に教えてくれた。そして、発表会にも誘ってくれた。だから、俺も、赤木さんに似た感じでお礼をするよ。」

意を決した。赤木は、僕に対し、ほんの一部だが赤木沙耶香という姿を見せてくれた。僕も、同じように、彼女へ、僕の姿を教え見せてあげるべきだと考えた。だからこそ、言おう。

「何？」

「今日、用事があるって言ったろ？ 今日だけじゃない。ほぼ毎日、俺も通っているところがあるんだ。」

「そうだったの。」

「赤木さん、格闘技って観たことある？」

「格闘技？ ボクシングとかプロレスとか？ ないよ。」

やはり、赤木も普通の人と変わらぬ格闘技の位置づけを抱いていたようだ。

「ボクシングとかとは、ちょっと違うんだけど、総合格闘技っていうやつ。そのジムに通っているんだ。」

「工藤君って、体が大きいのに、何も部活してないなんてもったいないと思っていたけれど、そんなことをやっていたのね。」

「でね、今度試合があるんだ。プロデビュー戦。」

プロという単語に、赤木は驚いたといった感じで、彼女の眼がいつもより大きくあけられた。僕は、彼女のそんな表情に目が合わず事ができなかつた。

「プロ？ すごい。」

「いやいや、たまたまそういう話きたただけで、プロといっても、テレビに映るわけじゃないし、小さい大会だから。」

照れています。と表現するように、僕は、照れ笑いを浮かべながら、右手で後頭部をかきながら答えた。

「でも、話があるだけでもすごいじゃない。」

「いつも会長からは、そんなんじゃプロっていえないぞって言われてるんだけどね。」

僕はため息をつき、うつむきながら答えた。

「皆は誘わないの？」

赤木は眉間に皺をよせ、僕の顔を覗き込みながら聞いてきた。せつかくの美形の顔がわずかばかり崩れていた。

「うん。デビュー戦だし、どうなるかもわからないから。敢て誘わない。俺も、怖いんだ。格闘技やっていることを皆が知って、どうなるのか？ 皆、俺を恐れて離れていくんじゃないかって。赤木さんと、一緒なのかな？」

「そう。でも、私は誘ってくれるのね。」

「言つたろ。お礼だつて。それに、もし仮に、このまま有名になってもなつたら、そんなことを考えてられないからね。俺もはじめの一步を踏み出すつてわけ。今度は俺が、いいもの見せてあげるよ。」

僕は、右腕を折り曲げ、力瘤を作り、そう答えた。

「随分頼もしいのね。」

「いや。調子に乗りすぎた。」

その後、一瞬だけだが、僕らは眼を合わせ、大笑いを互いにした。

目を覚ました時には、僕はベンチの上に寝そべっていた。目線の先には、白いクロスが張られた天井、そして、40Wの蛍光灯の明かり2本を灯していた照明器具。その光が、目覚めたばかりの僕の目には、頭痛を催すくらいに煌々としていた。

はて？ 僕は、今ここで何をしていたのだろうか？ そんな疑問を抱く。しかし、何かを考えると頭痛が酷くなっていく。

「気がついた？ よかった。」

その声の主はいったい誰？ 依然として続く頭痛を堪えつつ、首を声のした方向へ回してみた。

美栄？ 何だ？

「すみませ〜ん。気がつきました。」

おそらく、どこかの一室に僕はいるみたいだが、次から次へと、この部屋に入ってくる人の気配が感じられた。一気に周りが慌ただしくなる。

「気がついたかー。よしよし、頭は動かすな。今医者を呼んでくる。」

声をかけてきたのは、ジムの会長だった。いつもの、厳しい鬼のような形相が、この時ばかりは見られず、今まで見たことのない、優しさが溢れ出た表情だった。しかし、美栄といい、会長まで、なぜここに？ ここは、どこなんだろう？

「会長？」

「よしよし、まだ喋るな。」

会長は、僕の言葉を抑え付けるように慌てていた。

次に、僕の顔を覗き込んできたのは、白衣を身につけた30代の男だった。さっきの会長の言葉の通りであれば、この人は医者だろ

う。

「うん。瞳孔もすっかりしているし、今のところは問題ないでしょう。ただ、精密検査をしていただくことになります。まあ、大事をとって。」

医者の方は、ペンライトで僕の、目を照らし覗き込んだり、聴診器を胸に当てたりした。神妙な面持ちで、僕の診察をしている。

救急車呼んでください。

医者は、誰にというわけでもなく、声を高らかに言い放った。その言葉に反応してか、誰かが部屋の外へ駆け出していくのが気配でわかった。

「誠一。大丈夫？」

美栄は、まだ僕の傍に腰をかけていた。僕の右手が彼女の両手に包まれている。さっきよりは、少し余裕があつてか、目に入るものや状況を正確に認識することができる。彼女の目が、少し潤んでいた。

「会長。僕は？」

僕の声は、自分自身の耳を通してわかるくらい、かなり弱い。

「おまえ、KOされたんだ。」

「KO？」

「ああ。試合で見事に吹っ飛ばされた。」

「試合……。」

「何だ？ 覚えてないのか？」

「脳震盪を起こしましたから、前後の記憶が飛んでいる状態ですから、無理もないです。」

僕らの会話に割り込むように医者が言葉を挟んだ。そして彼が会長の疑問を解決した。しかし、僕にはまだ、この状況が全て飲み込

めていない。

「まあ、いい。取り敢えず病院だ。詳しいことは、あとでゆっくり話してやる。」

会長は、少々困惑気味な様子だったが、少しだけわかったことは、僕は今、皆から心配されていることだった。

しばらくして、ジムのトレーナーが部屋にやってきた。彼の声は、男にしては、少々高く、独特の声質だったから、耳にするだけで彼だとわかった。

「救急車到着しました。」

「よし。病院へは俺が付き添う。トレーナーたちは、ここら辺を片して、帰っていいから。」

会長が、周囲の人へそそくさと指示を出し、それに皆も従い、すばやく行動し始めた。

「あの〜。私も付き添ってもいいですか？」

美栄は、会長に、一人だけ場違いだと思ったのか、遠慮しがちな声で頼み込んだ。

「いいよ。お嬢ちゃんは、帰りな。家族も遅くなつては心配するだろう。」

「いいえ。もう家族には連絡しておきましたから、大丈夫です。」

「参ったな………。あの、救急車へは何人乗れますか？」

会長が、救急隊員の人に聞いた。

「2人くらいまででしたら大丈夫ですが。」

「わかりました。じゃあ、お嬢ちゃんもおいで。その方がこいつも安心するだろうから。」

「ありがとうございます。」

そのやり取りを、僕は、静かに見守った。

救急隊員の人が持つてきた担架に乗せられ、頭や体をベルトで固

定されてから、僕は部屋から運び出された。見上げた廊下の天井には、規則正しく、一定の間隔で蛍光灯が次から次へと視界へと映りこんできた。それらを見るとまた具合が悪くなってきた。

肌に触れる空気が変わり、外に出たんだと感じた。空は、雲がなく、朱色に染まっていた。疲労感がそこで、一気に押し寄せてきた。眠いな。少しだけど眠るかな。今日は、何があったかはわからないが、疲れた。

目を閉じ、僕は意識を失った。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2888r/>

---

転校生に恋をして

2011年10月8日19時19分発行